



Effect of hematuria on the outcome of IgA nephropathy with mild proteinuria.

著者名	田中 佳優
発行年	2015-11-20
URL	http://hdl.handle.net/10470/31340

主論文の要旨

Effect of hematuria on the outcome of IgA nephropathy with mild proteinuria.

(血尿の程度が IgA 腎症軽度蛋白尿症例の予後に与える影響)

東京女子医科大学内科学 (第四) 教室

(主任: 新田 孝作教授)

田中 佳優

Clinical and Experimental Nephrology published on line 2014 Dec 5.

[DOI 10.1007/s10157-014-1068-9]

【要旨】

IgA 腎症において、血尿の程度が予後に与える影響は不明である。本研究では IgA 腎症軽度蛋白尿症例において、血尿の経過が臨床経過や予後に与える影響について検討した。当院で診断した IgA 腎症のうち、尿蛋白が 0.5g/日未満でステロイド、免疫抑制剤、扁桃摘出術を施行されていない 88 症例を、尿中赤血球が 1 視野に 20 未満の症例 (L 群 40 症例) と 20 以上の症例 (H 群 48 症例) に分け、臨床所見、組織所見、腎生存率、進行における危険因子について比較した。結果は男性比と血圧は L 群で有意に高かったが、蛋白尿中央値と推定糸球体濾過率、オックスフォード分類による組織所見に有意差は認めなかった。腎生検 5 年以内では自然経過で両群とも尿蛋白中央値 0.5g/日以下で、尿中赤血球は 1 視野 10 個未満に軽快していた。Kaplan-Meier 法を用いた 15 年腎生存率は両群で有意差を認めなかった。レニン・アンジオテンシン (RAS) 系阻害薬は進行のリスクを減少させた。以上より、生検時の高度血尿は自然経過で軽快し、軽度蛋白尿症例においては血尿の程度による予後への影響はなかった。それらの予後は比較的良好、RAS 系阻害薬加療は進行を抑制すると示唆された。